

花につけし短冊よりも一ぐだりかきにくそなまがの山かこ

〔皇都午睡 三編上〕江戸市中端々に迄駕籠屋多く、一町に五軒と七軒はなき所なし、略中其餘通り筋木戸々々見附々々に辻駕籠とて明駕籠に尻打かけ往來を見かけ次第駕籠エく、旦那かこエと呼居る道中の雲介には非ずいは裏店より出る駕籠昇なり水邊へ用あらば船にて行ども山の手在所道へ行には駕籠の辨理よければ老人病人など駕籠借らんと思ふ時勝手よく又直段は大體極りありて格外にむさぼる事なし町駕籠は垂かごのみにあらず引戸おんぼつなど、て大小望の如くあり船駕籠是程自由な處他國にはあるべからず

辻駕籠の得意とする者は遊所通ひなり四里四方ある江戸の地に遊所なく深川本庄根津谷中麻布赤坂など遊所諸所にありけれども當時禁止となりて不自由なれば南に品川宿西に内藤新宿板橋北に吉原千住と此五ヶ所なり何れも日本橋より二里半三里に餘る道なれば行計りにも隙取れば纔の際に駕籠にて欠行歸りにも又其地より駕籠にて欠戻るゆゑ辻かご大に流行なるべし駕籠賃の相對も京攝の如く直切小切するにも及ばず四文錢何本とか南鐮とか埒早く乗と直に欠出す事誠に宙を走るが如し人立多き四ツ辻にでもエエハアと懸聲して腰をひねり肩には茶吞茶碗に水一杯入乗せ行ともこぼる事もあらじと思ふ計りに欠行なり誠によく馴れたるもの也此かご昇寒中にも肌を脱ぎ入ぼくろ見事にし手を盡したる武者繪杯あり辻々にて駕籠昇などに入ぼくろあるは勇ましく見よき物なり間にはかごの垂おろしあれ共見附々々にては手早く垂を上で往來群集の中を聊も滞る事なく走れり吉原大門口品川入口新宿入口夜明前より駕籠エくと聲をかけ數十人扣へり是は右にいふ江戸へ歸るを乗せる爲なり

〔本朝世事談綺器用〕江戸辻駕